

# 医芸俳壇



長野 有 泉 七 種

東京 篠 田 那 珞

地の限り空の限りを良夜かな

死は人も時もえらばず虫時雨

はればれと千草に風の吹く日かな

墓だけが残る故郷も豊の秋

露の香に五体おほる花野かな

花木槿咲いて睦まじ鳩雀  
夫々の産地名しるし梨並ぶ  
市川の梨も交りて仏前に  
大罪を謝す大臣や終戦日  
皆既口食見たと闇魔に報告せん

青森 朝 霧 朝 光

お若木のふとじろに逃げ稻雀  
菖蒲にぎやかにして虎視眈眈  
秋蝶の神経鈍る日なりけり  
菖蒲縄文人の貌となり  
ふる里の部屋の四角や木の葉鬆

滝近しハクセキレイに迎へられ  
青田波キガシラセキレイ見えかくれ  
木洩れ日やイワシセキレイ尾を横に  
プール開きセグロセキレイ轟れり  
欄干にはたと見合わすキセキレイ

新潟 中 村 雄 彦

つなぞ食つ血圧高き者同士  
一斉に自焼く匂キャンプ場  
それぞれが鱈寿司手にし汽車を待つ  
蘿草や疎開は遠くなりにけり  
また一寸顔つき変り入学す

千葉 秋 葉 琢 磨

東京 小 南 丁 字

一声をあげて夜蝉の落ちにけり  
大和路の朝な夕なの爽やかに  
室生寺にある国玉と秋の山  
草いきれ里の香のして若き口々  
新益や人ととの辯知り

お田植は陛下の固執意義深い  
万縁や亀鰐餌を競いけり  
蝉しぐれなお涼しげな阿修羅像  
亩のショー黒い太陽夏辭れり  
議席逸す晴耕雨読薄紅葉

長野 楠 本 勝 彦

石蹴つて氣がすんだかよつ秋の暮  
紅白旗いざ戦わん秋太鼓  
香煎こうせんを振舞ふ口上稻田照る  
歩もうよよそみしないで憩皇波ほくおなみ  
リタイヤー桐下駄鳴りて天高し

兵庫 廣辻 逸郎

敬老日胸のぬくもりコアラ抱く  
熱帯魚・サンゴに触れて日焼けする

シヨーネケルサン「」の海の白く深く  
山深く踊り子の道柿たわわ

大桶の湯を独り占め秋の雲  
敬老日胸のぬくもりコアラ抱く

東京 福神規子

いしぶみに歳月秋の来りけり  
ここな里宿を垣根に一位の実

かまつかにやつとふんぎつきにけり  
秋深みかもからまつに雨の降り

また強くなりし山雨や男郎花  
また強くなりし山雨や男郎花

東京 粉木秀穂

武感野の秋天なりとづべなひぬ  
野を行けば暫し道連れ赤蜻蛉

武感野の櫻高きに山瓜  
今生のこのひとときの秋日和

武感野の林の奥の秋没日  
武感野の林の奥の秋没日

東京 初芝澄雄

責空に赤鮮やかにサルスベリ

蝉盛り夏また盛り百里は

里山は今一瞬の紅葉なり

コスモスは日本の花のいとく咲く

完熟の柿に群れ来れ鳥の声

東京 福富清子

銀河系に住みなし銀河淡きかな

左右の田に秋空いつぱい退院す

蝸牛庵の暮尋ふ径や露時雨

光年の中に吾も在り十三夜

牡丹根分け和尚の話とめどなく

広島 渡辺晋山

音しづか老いし一人の巴里祭

夏の口に散れり九人の桜隊

木洩れ口に搖るる原爆殉難碑

終戦忌シユブレヒホール辻芝居

詞の坂の「悲しき酒」や秋時雨

東京 貢森三上忠英

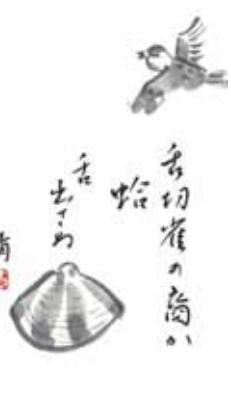
蝶定 とじて禪靈やんかひう

蝸牛庵=幸田露伴の別号、池上本門寺  
にお墓があります。

雀化して蛤となる=蛤の貝殻の色や模  
様が雀の羽根に似ているといふから

文鎮をしかと一筆秋夜長  
葱と酒下げて夜道を父が来る

(俳諧に疎い編集氏には勉強になります)



東京 福富清子

清風